

成人脳性まひ者の心理リハビリテーションキャンプにおける変化

— ICFの障害概念からの考察—

Psychological Rehabilitation Camp Impact on Adult Cerebral Palsy

- Consideration From ICF -

藤野 正和

I. 問題・目的

近年、障害者を取り巻く社会的な情勢は大きく移り変わっている。その背景には、2001年に第54回世界保健会議によって承認された国際生活機能分類（International Classification of Functioning, Disability and Health:以下ICF）の寄与する所が大きい。ICFでは、従来国際障害分類（以下ICIDH）で用いられていた「機能障害」、「能力障害」、「社会的不利」にとって代わり、マイナス面だけでなくICIDHで捉えることができなかったプラスの面についても記載できるようになった。

ICFでは、人の生活機能と障害に関する状況の記述を2つの部門から整理している。一つは生活機能と障害、もう一つが背景因子である。生活機能と障害の構成要素では、「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」である。「心身機能・身体構造」は心身機能を身体系の生理的機能（心理的機能を含む）、身体構造を器官・肢体とその構造部分などの身体の解剖学的部分と定義している。「活動」は課題や行為の個人による遂行のことであり、「活動制限」は個人が何らかの生活・人生場面に関わるときに経験する難しさと定義している。「参加」は生活・人生場面への関わり方のことであり、参加制約は個人が何らかの生活・人生場面に関するものと定義している。背景因子の構成要素では、「環境因子」「個人因子」である。「環境因子」は人々が生活し、人生を送っている物的な環境や社会的環境、人々の社会的な態度による環境を構成する因子のことであり、また、「環境因子」については、個人の外部にあり、その人の社会の一員としての実行状況、課題や行為の遂行能力、心身機能・構造に対して、肯定的な影響または否定的な影響を及ぼすとされている。「個人因子」は、個人の人生や生活の特別な背景であり、健康状態や健康状況以外のその人の特徴からなる。これは性別、年齢、性格、習慣、社会的背景など含まれ、これらの全部または一部が、どのレベルの障害においても一定の役割を持つとされている。このように、ICFでは障害者だけでなく、すべての人の保健・医療・福祉サービス、ひいては社会システムや技術のあり方の方向性を示唆するものである。

ICFに関する先行研究については、いくつかの視点で論じられている。上田（2003）は、リハビリテーション医学の分野において、「ICFに立って生活機能のすべてについて効果を検証すべきで、「心身機能」についての効果だけでなく、かならず「活動」と「参加」に関する効果をみるべきである。特に「活動」に直接介入することによる「活動」自体の向上の効果と、それによる参加向上の効果を証明することには大きな可能性がある」と述べている。また、川間（2006）は、教育の分野において活動制限や参加制約、環境因子に関連する研究が増加している点に着目し、その背景として心身機能の障害を中心に置く医学モデル的な考え方から生活機能に中心を置く考え方への変化があることを指摘している。以上のことから、障害者の支援を考えていく上で、ICFの障害概念のような心身機能のみならず、活動や参加、環境因子を含む包括的な枠組みで捉えていくことは、今後より求められていくことが考えられる。

今回ICFの概念を用いて考察を行う心理リハビリテーションキャンプとは、動作法を中心とする宿泊集中訓練を行うプログラムである。心理リハビリテーションキャンプでは、1日3回の動作法を中心に、朝の会、食事、入浴、集団心理療法など集団での生活の中で臨床的援助が行われる。動作法とは、人間の動作を単なる身体運動と区別し、「意図通りの身体運動を実現する努力過程である『動作』を通じて主体者に働きかけ、自体に自

己操作を含む自己全体のより適切な活動を促そうとする援助」(成瀬、1995)である。本吉(2012)は、ICFの障害概念から肢体不自由児における心理リハビリテーションキャンプの意義について検討したところ、「心身機能・身体構造」及び「活動」「個人因子」の変化が主体的な「参加」の促進に影響を与えることを指摘している。しかし、ICFの障害概念から心理リハビリテーションキャンプについて検討された研究は十分とは言えない。

本研究で取り上げる事例は、知的な遅れを伴う成人脳性まひの男性(以下、A)である。Aは特別支援学校高等部を卒業後、障害者就労施設で働いている。就労後は、特別支援学校時よりも周囲との関わりが少なくなり、そのことを危惧された保護者がAに社会とのつながりを持てるように周囲とAをつなぐ働きをされていた。その一方で、ここ数年家庭等で情緒的に不安定になる様子が見られるなど以前には見られなかった様子が窺われた。

以上のことから、本研究では、成人脳性まひ者における心理リハビリテーションキャンプでの変化について検討するとともに、ICFの障害概念からAの変化について考察することを目的とする。

II. 事例概要

1. 対象者：A、23歳、男性
2. 診断名：脳性まひ
3. 家族構成：父、母、兄、A
4. Aの知的側面と心理的側面：

知的な遅れは見られるものの、言語的なコミュニケーションは可能であり、周囲からの質問や声かけは理解できる。普段から親しい関係の人とはスムーズなコミュニケーションをとることができるが、A自身の人見知りの性格もあって、初対面の人には言語的な表現をすることは少なく、特に新奇場面では緊張が見受けられ、受け身的なかかわりが多く見られる。その一方で、保護者に対して口調が強く、保護者が気がけて声かけをすることに對して、「わかっている」と強い口調で返答する様子が見られる。

5. これまでの経緯：

Aは、これまで10回程度キャンプに参加しており、今日のキャンプに対するトレーニー及び保護者に期待は強いことが窺われた。また、ここ数年、日常生活の中で時折情緒的に不安定なることが見られており、保護者はその点について気にかけていることが語られていた。さらに、身体面については、年々体重が増加傾向にあり、移動する際ゆっくりとした動きになることが多く、同じ姿勢で長時間過ごしていることもあり、身体の緊張も強くなっている様子が窺われた。

6. キャンプに対するニーズ：

A自身のニーズとしては、「股関節が固いので、あぐらまでいきたい」とこれまでのキャンプの経験からA自身で目標を立ててキャンプに臨んでいることが窺われた。また、「床での移動に困っている」と日常的な動きを改善したいという希望も語られていた。保護者からのニーズとしては、「自分でできることは人に頼らず、時間がある時は自分でやって欲しい」とA自身の主体的な活動を維持していくことを望んでいることが窺われた。また、「キャンプ中は疲れが出てくると不機嫌になる」や「自分から周囲の人に働きかけることが苦手」などこれまでのキャンプで見られたAの様子やAの性格等に配慮してほしいとのニーズが挙げられた。

7. 心理リハビリテーションキャンプの実施期間と構造：

(1) キャンプの期間：X年8月18日～8月23日

(2) キャンプの構造：キャンプ中は1日3回の動作法、集団療法、トレーナー研修、親の会などが行われる。また、各班にスーパーヴィジョンを行うスーパーヴァイザーがおり、キャンプ中随時行われる。また、援助を受ける側をトレーニー、援助を行う側をトレーナーと呼び、トレーニーとトレーナーはペアになり3～4ペア程ずつ

班に分かれており、研修室にて集団形式で行われた。筆者の立場は、Aの所属する班のスーパーヴァイザーであった。

8. インテーク時の見立てと方針：

(1) 見立て

坐位姿勢については、下肢の伸展の緊張が強く、長坐位のみ保持可能。しかし、上部が前傾してしまうため、両腕について身体を支えていた。また、台坐位でも長坐位同様に下肢の伸展の緊張が見られ、左脚は多少曲げることが可能であるが、左脚は曲がりにくい。さらに、左背中に慢性的な緊張が強く見られ、重心も左重心が顕著になるため、長坐位の時より両腕で支えておかないと不安定さが窺われた。膝立ち姿勢では、股関節まわりの強い屈の緊張が見られ、それに合わせて上肢全体に反りの緊張が入ってしまう様子が窺われた。立位姿勢では、立ち上がりの動作は立ち上がることは可能であるが、腰を入れた状態で踏みしめることが難しく、重心も左脚のみ重心がかかっていた。さらに、これらの身体の動かしにくさや慢性的な緊張から自らの身体について希薄さも窺われた。

(2) 方針

インテーク時の見立てと合わせてAや保護者のニーズを考慮して以下の方針を立てた。

- ・上下肢に慢性的緊張が見られたため、リラクゼーション課題を用いて、慢性的な緊張をコントロールできるようにすること
- ・坐位、膝立ち、立位などのタテの姿勢を安定して保持できるようにすること
- ・A自身が身体の変化に気づき、自らの身体の変化について意識して行えるようになること

Ⅲ. 事例の経過

※「」はAの発言、<>はトレーナーの発言、『』は筆者の発言で表記する。

1. キャンプ1日目

(1) 1日目の様子：

はじめに、上肢の慢性的な緊張からリラクゼーションを行った。背中の凸の周辺部を中心に躯幹のひねりを行いながら、リラクゼーションを行うと、トレーナーの援助に合わせて緊張を弛める様子が見られる。4番の弛めを行った後、台坐位での姿勢保持課題を行うと、慢性的な緊張が弛んだ事や背中に力を入れて保持できるようになってきた。姿勢保持課題の中で、トレーナーから「ここに力を入れていることがわかる？」と尋ねたところ、「わかります」と答えるなど、A自身も身体の変化を実感していることが窺われた。次に膝立ちでの姿勢保持課題を行うが、股関節の緊張や上体の反りの緊張が強く、またトレーナーも安定して援助することが難しく、膝立ち姿勢を作ることは難しかった。

(2) 所感

はじめは、トレーナー、Aともに初めての組み合わせということもあり、お互いに緊張している様子が窺われた。その一方で、トレーナーとスーパーヴァイザーとのやりとりを見て、Aが笑う様子も見られた。また、動作法の中では、A自身は身体の変化を持てているとは答えていたものの、トレーナーはAがあまり時間を持てていないのではないかと感じており、Aとトレーナーとの間に感じ方の不一致が見られた。さらに、訓練が終盤になり、トレーナーが一つの課題を繰り返し行っていると、Aが不機嫌そうになる様子が見られた。

(3) スーパーヴァイザーとして助言

- ・膝立ち姿勢のなかでの援助について確認を行い、トレーナーが安定して援助できる方法を伝えた。
- ・Aとトレーナーとの感じ方の不一致について起こりうることなので、課題の遂行や身体の変化について、Aと言語的なやりとりだけでなく、トレーナーの動作を通じた身体の変化のやりとりを行うことを助言した。

2. キャンプ2日目

(1) 2日目の様子

1日目の同様に上肢のリラクゼーション課題を行い、台坐位・膝立ちの中で姿勢保持・動きの確認を行った。上肢の緊張をコントロールできるようになってきたことで、上肢の動きが出やすくなり、台坐位の際に1日目よりも、A自身で上体を起こし、姿勢を保持できるようになってきた。膝立ちでは、援助を行う際に上肢が安定していない状態で援助を行うと、上肢の反りの緊張が強くなり、腰の動きがあまり見られなかったが、上肢が安定した状態で援助を行うと、トレーナーの援助に応じてA自身で腰を動かすことができてきた。膝立ちでの姿勢保持、腰の動きができてきた。次に、片膝立ちの援助を行った。しかし、片膝立ちについては、股関節まわりの緊張が強く、両脚の分離した動きをすることも難しかったので、左脚を前に出して姿勢を作ることはできていたが、右脚を前に出して姿勢を作ることはできなかった。

(2) 所感

膝立ちの援助については、上肢の状態を整えることで、腰の動きが出やすくなる様子が見られた。また、援助者が安定した援助を行うことで、Aの不安が軽減される様子が窺われた。トレーナーは、Aに動かしてもらうこととトレーナーが実際に援助を行う程度との間で試行錯誤している様子が窺われた。そのため、Aに課題を伝える際も曖昧に伝えてしまい、Aもまた身体の感じをつかみにくいところもあったため、トレーナーがAに確認をしながら援助を行う様子が窺われた。

(3) スーパーヴァイザーとしての助言

・各姿勢において、トレーナーがどのような動きをAに求めているのかを明確にし、トレーナーが安定した状態で援助を行える方法について確認を行った。

・Aの身体の動きだけでなく、課題の中でどのような心理的状态にあるのかということを意識することを助言した（たとえば、膝立ちの援助の際、Aに不随緊張が入ると、Aは身構え、緊張が強くなるため、一度安定した姿勢に戻り、落ち着いた上で再度課題に取り組む）。

・片膝立ちの課題について、歩行につながる重心移動の動きを掴んでもらうこと、股関節、足首の弛めにつながることなど片膝立ちでのA課題について整理・確認を行った。

3. キャンプ3日目

(1) 3日目の様子：

膝立ちでは、トレーナーの援助を減らしても、A自身で姿勢保持できるようになってきた。その一方で、Aが膝立ちの際に膝に痛みを訴えることがあった。A・トレーナーと一緒に確認した所、腰を後ろに戻す際、肩の位置が膝より前に出てしまうと痛みを訴えるが、肩と膝の位置を揃えると痛みもなく行えていた。そのため、Aの現在の姿勢について、A・トレーナーともに確認しながら課題を行った。また、下肢については、臥位姿勢で股関節まわりのリラクゼーション課題を行い、片膝立ちの課題に移行していった。片膝立ちでは、左右ともに前方の脚に重心を移し過ぎると、Aが股関節に痛みを訴え、上体が前に倒れたり、上体が反ったりと安定した姿勢を取ることが難しい様子が見られた。そこで、再度股関節周りのリラクゼーション課題を行い、援助の際にAの重心の位置について確認を行いながら課題を行うと、Aは痛みを訴えずに少しずつA自身で重心を移す様子が見られるようになってきた。動作法の最後に、Aより「一度を歩いてみたい」ということで歩行課題も行った。

一方で、動作法以外の場面では、昼食時にAからトレーナーにAのきょうだいのことについて話すことやA自身から「トイレにいいですか」と伝えてくれるようになってきた。そのことで、トレーナーもAのことについて色々と質問することができるようになってきた。また、集団療法の際、自ら主体的に順番を決める提案を行うなどの様子も見られ始めた。

(2) 所感：

膝立ちの姿勢では、安定して姿勢を保持できるようになり、A自身で動きがより見られるようになってきた。また、この日からAからトレーナーに痛みを訴えるなど、Aからトレーナーに対する働きかけも多くなり、Aとトレーナーのやりとりが頻繁に行われるようになってきた。さらに、それは動作法場面以外でも見られるようになり、食事中にAが自らの兄弟のことについて語っていたことや他の活動にも主体的に参加することなどから、Aの心理的な変化が大きく見られ始めた。

(3) スーパーヴァイザーとしての助言：

- ・Aの主体的な動きが少しずつ見られるようになってきたので、援助を徐々に減らしながらA自身が実感を持って身体を動かせるように援助を工夫していくことを助言した。
- ・各姿勢や各課題間のつながりについて意識して行うことを助言した。
- ・今後は移動課題も少しずつ取り入れながら、Aの日常生活につなげていけるように課題を工夫する助言した。

4. キャンプ4日目

(1) 4日目の様子：

膝立ちでは、姿勢を保持することが安定し、トレーナーの援助に応じて腰を前後に動かす動きが見られるようになってきた。しかし、トレーナーが課題に集中するあまり、課題を行う時間が長くなりすぎると、Aの方から膝の痛みを訴える様子が見られた。片膝立ちでは、重心の位置には意識しているものの、軸足の外側に腰の流れに気づかず援助を行うと、Aが股関節に痛みを訴える様子が見られた。そこで、軸足をしっかりと作り、それから前方に出している足に重心を移行していくことを意識して行っていった。また、Aが台坐位での姿勢作りを行う際、「動かしづらい」と語ったことや下肢のリラクゼーション課題を行っている際に「弛んできてる感じがある」というなど自らの身体の感じについて話すことが増えてきた。さらに、動作法終了後、車いすに移動する際も、「歩いていきたい」と言う様子も度々見られるようになってきた。動作法以外の場面では、集団療法の際出し物の練習をしていると、「みんな立ってしましましょうか」というなど周囲に対する働きかけも増えてきた。また、トレーナーには「ボランティアが来てくれることが楽しみ」などA自身のことについて語る様子も見られた。

(2) 所感

膝立ち、片膝立ちの課題では、トレーナーが姿勢を支えるような援助は少なくなり、少しずつA自身で身体を動かしていくことが増えてきた。また、前日よりA自身が自らの身体の感じや動きについて語りが多く見られるようになり、トレーナーもAの意見を伺いながら、課題を組み立てていけるようになった。その中で、A自身がより動きの中で身体の感じを確かめたいと思うようになってきたことが窺われた。

(3) スーパーヴァイザーとしての助言

- ・リラクゼーション課題や姿勢保持課題の中で、Aから自らの身体の感じについて語ることが増えてきたので、今後は身体の動きについてAの実感が伴うように援助を行っていくことを助言した
- ・リラクゼーション課題の後には、タテ系の動作課題を行い、弛める体験で終わらずに身体を動かす体験まで行っていくことを助言した

5. キャンプ5日目

(1) 5日目の様子：

台坐位や膝立ちでは、トレーナーが部分的に援助を行い、細かい身体の動きについて確認を行っていったところ、Aは身体に意識を向けて自ら動きの微調整する様子が見られた。また、片膝立ちでは、腰の流れを整え

ることやトレーナーが後方から援助を工夫したこと、前方の脚へ重心を乗せすぎないようにしたことなどにより、痛みもなく、過度の緊張を入れないうま姿勢ができた。また、<前に出すよ>と重心移動を促すとA自身で重心移動することができた。台座への移動の動きにつなげていくために、四つ這いの課題も取り入れていった。動作法以外の場面については、集団療法の際、音楽会の歌詞をみんなで考えていると、「みんなで会いたい」という歌詞を入れたいと語ったり、お楽しみ会の際に、トレーナーに「キャンプに来ることが楽しみ」「また来年も来たい」と語るなどの様子が見られた。

(2) 所感

キャンプも終盤に差し掛かり、Aは自らの身体に対する意識が高まり、細かい動きまで意識して動かそうとする様子が見られていた。また、トレーナーとの課題の共有に関しても、A・トレーナーの両者が互いに身体の動きや身体の変化について伝え合うことができきており、動作課題を通して、両者が一緒に取り組んでいるという感じが持てるようになってきていた。

(3) スーパーヴァイザーとしての助言

- ・これまでの身体の変化や身体の動きについて一つ一つAとトレーナーで確認しながら、課題を行うことを助言した。
- ・Aが家庭で取り組むことができる課題について、トレーナーが整理し、Aや保護者に伝えることを助言した。

6. キャンプ最終日

(1) キャンプ最終日の様子：

はじめはじっくりとこれまで行ってきたリラクゼーション課題を行い、その後坐位、膝立ち、立位など各姿勢の中での姿勢や身体の変化について確認を行った。A自身も自らの身体の変化について、実感できるようになり、トレーナーとともに主体的に課題に取り組む様子が見られた。

保護者とのキャンプについての振り返りの中では、いつもキャンプの中日を過ぎたあたりから調子を崩して情緒的な不安定さが見られていたが、今回のキャンプでは全日程を通して身体的にも精神的にも充実したキャンプを過ごせたということが語られていた。また、キャンプが進んでいくにつれて、普段は受け身的なことが多いが、動作法やキャンプでの生活を通して、心理的な構えが弛まり、そのことが身体的な弛めにつながったのではないかとことも語られていた。また、身体的な部分については、いつも援助してもらったことが多く、受動的になることが多かったが、今回のキャンプを通して、A自身が主体的に動こうとする様子が頻繁に見られるようになったとの感想を話されていた。

(2) 所感とまとめ

キャンプ最終日は、今まで行ってきた課題を一つ一つじっくりと確認するようなAの様子が窺われており、坐位での安定した保持や立位姿勢の踏みしめている感じが持てるようになり、歩行では脚をしっかりと前に出せるようになるなどA自身も自らの身体の変化について実感が持てるようになっていた。

7. 今回のキャンプの成果

①上肢の動きについては、慢性的な緊張が弛めることができ、意識して動かすことができる状態になったことで、上体を自分で起こせるようになってきた。また、インテーク時には、台座位を保持する際に、手を膝に着いて、上体を支えていたが、楽に座位を保持できるようになったことで、手での支えなくても姿勢を保持できるようになった。

②下肢については、ひざ裏の慢性的な緊張を弛めることができ、曲げることができるようになったことで、あぐら坐位の姿勢をとることができるようになった。また、股関節周りの緊張や上肢の緊張を弛めることができ、

膝立ちや立位の姿勢を取りやすくなった。

③片膝立ちの際、腰の動きに注意を向けて取り組み、トレーナーの援助に応じて腰を入れることができるようになったことで、軸足から出し足に重心を移すことができるようになった。

④歩行をする際に、振り出した脚が軸足の前に出て交差するような様子が見られていたが、両脚の分離した動きが見られるようになり、脚を交差せずに、前に出せるようになった。

⑤訓練以外の場面については、キャンプが進むにつれて、主体的に他者に関わることや活動に参加することが増えていった。

IV. 考察

1. ICFの概念からみたAの理解とキャンプを通じた変化

(1) 「心身機能・身体構造」における理解と変化

Aは、今回のキャンプ以前から年々体重が増加傾向にあり、それに伴い移動の動きがゆっくりとした動きになっていき、身体の慢性的緊張も強くなってきていることが窺われた。インテークの段階では、両下肢の強い伸展の緊張、左腕も拘縮が見られていた。そのため、自ら身体を動かすことは少なく、台座やいすなどを使わないときは長座での姿勢で過ごすことが多くなっていった。また上肢は屈の緊張が強くなり、両腕を使って支えないと上体を起こした状態で保つことが難しかった。

今回のキャンプでは、リラクセーション課題を通して、上下肢に見られた慢性的な緊張を弛めることができた。また、坐位や膝立ち、立位姿勢の中で自らの緊張をコントロールして、しっかりと踏みしめることで、姿勢を保持することができるようになった。また、リラクセーション課題やタテ系動作課題を行う中で、自らの身体に対する意識が高まっていく様子が窺われた。

(2) 「活動・参加」における理解と変化

Aは、上下肢の慢性的な緊張が強まるに伴い、自ら身体を動かすことは少なくなり、台座やいすなどを使わないときは長座での姿勢で過ごすことが多くなっていった。そのため、日常的に行動を行う際、援助を必要とすることが多く、自らの意思のみで行うことが難しい経験を重ねていった。

今回のキャンプでは、「心身機能」の変化に伴い、自らの身体を動かすことができるようになったことで、歩行の課題に自ら取り組んだり、他の参加者に対する働きかけが増えたり、集団療法などで積極的に活動に参加したりするなどA自身の活動に対する主体性が変化したことで、「活動・参加」がより促進されたと考えられる。

(3) 「背景因子」における理解と変化

Aの置かれている現在の環境は、限られた社会的環境と人的な環境である。それは、Aが様々な思いを抱えていたとしても、それを叶えることが難しいことも多い。たとえば、Aが「歩きたい」「自分で動きたい」と思っているとしても、周囲の状況によって難しくなる。このような「環境因子」はAに心理的な変化をもたらしていると考えられる。Aがここ数年情緒的に不安定になっていることは、それまでの特別支援学校のような少人数の中で教員と関わっていた状況から障害者就労施設のような環境の変化が大きく影響していると考えられる。その中で、様々な心理的な葛藤を抱え、情緒的な不安定さが見られたのではないかと考えられた。

今回のキャンプでは、「環境因子」としてのトレーナーの役割が大きい。トレーナーは、Aにとっての「環境因子」やAの抱える「個人因子」を考慮し、動作法の援助のみならず、心理リハビリテーションキャンプの中で様々なかかわりを行ったことで、今回のキャンプで見られたようなAの変化をもたらしたと考えられる。

2. 心理リハビリテーションキャンプにおけるICFの障害概念から見た変化とその意義

前述では、構成要素ごとに検討を行ったが、それらの構成要素が心理リハビリテーションキャンプの中でど

のような相互作用をもたらしていたのかについて検討を行う。

Aは「機能障害」を抱えており、そのことが「活動」や「参加」に影響していることが窺われた。これは、例えばAが自ら他者との関わりも求めていたとしても、そこには自らの身体の動きにくさがあり、相手が近くにいれば関わるができるが、物理的な距離が離れていけば関わることは難しくなっている。しかし、心理リハビリテーションキャンプでは、Aと同じような「機能障害」を抱えるトレーニーが多く、そのトレーニー一人一人にトレーナーが担当して関わっていることで、たとえトレーニー同士だけでは難しいことも、トレーナーが間に入り、互いの関わりを円滑に促す役割を果たすことで、「活動・参加」の難しさは改善される。このトレーナーの役割は「環境因子」の一つとして考えられる。また集団療法では、「機能障害」を抱えるトレーニーでも楽しめるような活動や普段の生活であれば注目されることの少ないトレーニーに焦点を当てる活動を行うことで、日常的には得ることのできない体験を積むこと機会になると考えられる。このような体験は「個人因子」に大きな影響を与えると同時に、「個人因子」にもたらされた変化がさらに「活動」や「参加」を促進することにつながっていくと考えられる。このように、心理リハビリテーションキャンプでは、ICFの構成要素を促進する環境が整っており、この影響はトレーニーのみならず、保護者をサポートする上でも重要である。Aが語っていたような「また来年も来たい」と思えるような心理リハビリテーションキャンプという環境を提供していくことは、障害児・者の生涯を通じた支援においても非常に意義があると考えられる。

謝辞

本事例をまとめるにあたり、快くご協力いただいたAさんとその保護者、トレーナーの方に深く感謝申し上げます。また、本キャンプでご助言を頂きましたキャンプ長の岡嶋一郎先生をはじめ、スーパーヴァイザーの先生方とこのような機会を頂きました長崎県肢体不自由児者父母の会連合会に深く感謝申し上げます。

参考引用文献

- 上田敏（2003）国際生活機能分類（ICF）とリハビリテーション医学の課題 リハビリテーション医学, 40, 737 - 743.
- 川間健之介（2006）障害に関する教育心理学的研究の動向と課題—国際生活機能分類（ICF）の観点から—教育心理学年報, 45, 114 - 124.
- 世界保健機関（2002）国際生活機能分類—国際障害分類改訂版— 中央法規.
- 成瀬悟策（1995）臨床動作学基礎. 学苑社.
- 本吉大介（2012）ICFの障害概念からみた特別支援学校に通う肢体不自由児に対する心理リハビリテーションキャンプの意義 リハビリテーション心理学研究, 39 (1), 47 - 58.